

研修会等参加報告書

平成30年11月22日

天童市議会議長様

会派名 てんどう創生の会

代表者氏名 渡辺 博司



下記により、会派において研修会等に参加してきましたので報告します。

記

研修会等名	地域医療政策セミナー
主催団体名	全国自治体病院経営都市議会協議会
日時	平成30年11月 1日(木) 13:00~16:40
会場・場所	都市センターホテル3階コスモスホール 東京都千代田区平河町 2-4-1
全体参加者数	286人
内容等	<p>◎士別市病院事業管理者・院長 長島 仁氏 「『崖っぷち』自治体病院～北の大地で経営改革を目指して～ →“北の1億円男”と呼んでください!」 講演の要旨は、次のとおりである。 地域医療の火を消してはいけないという発想で経営改革を始めた。病院で行われている診療行為と介護の部分を切り離すことはできない。超高齢者を支える医療の提供が重要だということで、病院のやり方を変え、急性期医療中心から慢性期医療中心に大きくかじを切った。急性期診療の病棟、ベッド数を減らし、慢性期診療の病棟、ベッド数を多くした。 トップ同士が仲よくないと病院同士の関係は変わらない。自治体病院のやり方を大々的に変えていくのは、絶対トップダウン以外にないと思う。 経営改革の結果、外来患者数は減り続けているのに2年続けて入院患者数が増えた。療養病棟を増やし、慢性期の診療の量を増やして、士別市の人口動態を考えた病院運営に変えてきたからだ。士別市立病院で人生の最後を迎える士</p>

	<p>別市民の割合が4割から6割に増えた。</p> <p>首長と病院のトップとの関係が最重要で、市長は「地域医療に勝る政策なし」と常に言う。私も職員に、士別市からの繰り入れを1円でも減らそうと言っている。黒宇は、市の理解なくしてできなかった。</p> <p>医療は誰のためにあるのか。医者も大変、地方自治体も大変、病院も大変。でも、やっぱり1番大変なのは患者、市民の皆さんだということを、我々は忘れてはいけない。とにかく頑張るしかない。</p> <p>◎株式会社シルバーウッド代表取締役 下河原 忠道氏</p> <p>「看取り率76% 新たな看取りの場として機能するサービス付き高齢者向け住宅『銀木犀』の挑戦」</p> <p>講演の要旨は、次のとおりである。</p> <p>全て込みで月15万～20万円、厚生年金の範囲内で生活ができる。</p> <p>基本的に管理はせず、過度な医療はしない、自然に老衰死できる高齢者住宅をつくろうと決めた。「地域住民としての暮らしが実感できるかどうか」「生きがいを見つけて追いかけられる場所」を重要視している。</p> <p>生きがい、役割をもって生活しており、役割がその人らしさを取り戻すということを認知症の当事者から教えてもらった。</p> <p>確かに不便はあるが、不幸じゃないんだということを地域の人たちが知ることはずごく大事。</p> <p>基本方針は、なじみの場所で生活者のまま老衰死できる住宅をつくる、ただそれだけ。看取りを進めていくと介護士の離職率も下がる。このホームはずごくいいことをしているということが介護士のモチベーションの高さにつながるわけで、あそこのホームはいいねと紹介が入り、入居率も家族の満足度も高い。</p> <p>大事なのは、介護が主体的に看取りに参加するということ。看取りをすることは介護士たちにある程度の緊張を強いるが、それを経験していくと介護がスキルアップしていく。</p>
<p>市政の課題への参考等</p>	<p>北海道士別市病院は、急性期医療中心から慢性期医療中心への転換を図ったが、天童市民病院と似たような医療機関の配置状況であり、参考になるものであった。</p> <p>サービス付き高齢者向け住宅『銀木犀』が基本方針している「過度な医療はしない」「自然に老衰死できる高齢者住宅をつくる」「地域住民としての暮らしが実感できる」「生きがいを見つけて追いかけられる場所」といったことは、今後の福祉を考える上で参考になるものであった。</p> <p>今回の2つの事例の他にも、今後、様々な事例や制度を研究し、天童市民病院の今後の経営改善や天童市の福祉向上に活かして行きたい。</p>

	参加議員氏名	感想等
参加者の感想等	渡辺 博司	<p>第14回地域医療政策セミナーに参加し、北海道士別市病院事業管理者・院長の長島仁氏と、株式会社シルバーウッド代表取締役の下河原忠道氏の講演を拝聴した。長島氏は急性期診療中心の医療から慢性期診療中心の医療に大きく舵をきった。そして、他医療機関との連携強化を行うことにより、急性期診療減少による市民への負担を軽減した。また、慢性期病棟のベッド数を増やし、人員配置の適正化を目指したことが、経営改善効果をもたらした。赤字経営から1億5千万円の黒字へと経営改革が実現できたという講演であった。市民への負担軽減と、病院の経営健全化は一見相反するものであり、それを同時に達成する改革のすごみを感じた。</p> <p>下河原氏は看取りの場として、共同生活での施設よりも、馴染みの場所で生活する高齢者向け住宅での老衰死が理想とのこと。地域の方々が気軽に集まり、高齢者と接する機会をつくることで、多様なつながりが生まれる場になったという講演であった。</p> <p>天童市民病院では「天童市民病院中期経営改革」をもとに、経営健全化が確実に進んでいる。両氏の講演は市民病院の更なる経営健全化と、これから直面する2025年問題の解決策のヒントになると感じた。</p>
	遠藤 喜昭	<p>士別市立病院院長の長島仁氏の赤字体質の状況を打破するために新病院移転を機に黒字へと転換させた内容は参考になった。</p> <p>特に、人口減少や高齢化社会の中で病院経営はどれも厳しいが、士別市は広大な面積に2万人に満たない人口であり、お話の中でお聞きした内容は天童市の比ではなかったが、長島病院長が市長からの強い要請で事業管理者を兼務し経営改善に向けて行ったのは、これまでライバル関係であった名寄市立病院との連携で、これまで行ってきた「急性期医療中心」から「慢性期医療中心」に大きく舵を切ったことだ。事故などによる救急患者はなるべく名寄市立病院に届けることで、医者や看護師を大きく削減でき、更に病気療養患者を中心に受け入れ、訪問治療の充実に努めたことも市民に受け入れられたとのこと。</p> <p>現在天童市立病院も、医師の都合などで救急患者の受け入れが良くないという市民の声もあり医者の確保に苦慮しているようだが、県立中央病院があるので、本市においても同じような「慢性期医療中心」に舵を切ることを明確にしてもいい時期に来ているように感じた。</p>

		<p>(株)シルバーウッド代表取締役の下河原忠道氏によるご講演については、次のように感じた。</p> <p>1. 高齢者住宅銀木犀のコンセプト</p> <p>①多少の障害があっても暮せる、②地域住民として暮らしを実感、③役割を見つけ追いかける場所、役割を与えられるとボケを防ぐ効果</p> <p>2. 具体的施策</p> <p>①子供たちが来てくれるよう駄菓子屋を施設に設営、②地域住民が来てくれるようレストランを施設内にオープン、一緒に食事することで地域の理解が進む、③寺子屋、コンサート等様々な行事ができる場所を提供、施設使用料無料で対応、④家族と看取りに関して必ず話し合いを行う、⑤VR（拡張現実）で疑似体験を通して認知症を理解してもらう活動、人と一緒に笑いあえる関係の構築</p> <p>3. 感想</p> <p>実際に銀木犀の評判はいい。家賃食事代等は月額約19万～22万円と高めだが、地域とのかかわりを取り入れた手法は入居者の生きがいや認知症を防ぐことにつながる。天童市の高齢者施設の取り組みを点検していきたい。</p>
	<p>三宅 和広</p>	<p>県立中央病院、山形大学医学部附属病院、山形市立病院済生館などの大きな病院が周辺にある天童市民病院は土別市病院と同じような状況である。天童市民病院も急性期医療中心から慢性期医療中心に転換する必要があると感じた。ご講演では、転換を図る過程での経営トップの考え方をお聴きした。天童市民病院では市長自らが病院事業管理者となり強い意思を持って病院の経営改善に取り組んでいる。今後の経過を注視していきたい。</p> <p>サービス付き高齢者向け住宅『銀木犀』の取り組みは、地域を巻き込んで高齢者の生きがいを作り出していることや、過度の医療を施さず看取られながら自然な老衰死を迎えることなど、今後の医療・福祉の在り方を考える上でたいへん参考になるものであった。</p> <p>ただ、銀木犀は厚生年金の受給者でないと利用できないが、国民年金の受給者でも同じように生きがいを持ち、看取られながら自然な老衰死を迎えることができるようにする必要があると感じた。</p>

	<p>笹原 隆義</p>	<p>士別市立病院・事業管理者兼院長の長島仁氏によるご講演については、次のように感じた。</p> <p>地方自治体病院の経営がどこも難しいかじ取りをしていかなければならない状況の中、士別市立病院では、当病院の位置づけをしっかりと明確にした事が大きいものであろう。それは、隣の自治体にも同規模の市立病院があり、そこを急性期にして士別病院を急性期から慢性期に転換したことである。しかし、急性期のような派手な手術がなくなり、若手医師などからの魅力が損なわれてしまう弊害も出てきてしまう。そもそも北海道の医療は面積が広い割に医師不足が深刻であり、夜勤で来てくれる医師の確保も相当苦勞している模様。そこに慢性期病院にすることによる更なる追い打ちが懸念されていた。しかし、隣の自治体病院とのすみ分け・連携を強固なものにして、介護施設との協力、かつ市長との良好な関係のもと、看護師・職員にも大きな意識改革を遂行したことで、患者への寄り添う医療が進み、近隣自治体からの転入院患者が大幅に増加した。結果的に一般会計からの繰り入れ無しに1億5千万円の黒字を達成した。</p> <p>天童市においても、中途半端な位置づけから今後の人口減少も含めて急性期の需要が減る予測であり、いかに慢性期・回復期への移行をスムーズにできるかがポイントになってこよう。もちろん、その中においても優秀な医師確保は最重要である。この点をいかに進めていけるかが問われると感じた。</p> <p>(株)シルバーウッド代表取締役の下河原忠道氏によるご講演については、次のように感じた。</p> <p>高齢化社会の中、規模の大きな特別養護老人ホームなどの施設を建てるのが難しくなっている。しかし高齢者は増え続けている現状で、いかに終の棲家を確保していくか、打開策のひとつがサ高住である。しかしサ高住もサービス面から金銭面までピンキリであり、いかにより良い施設に住むことができるか。今回の下河原氏の運営する会社のサ高住には入所率が非常に高く、また、近隣地域との関係も強くしている。特に印象的だったのが、地域の子供たちの遊び場になっており、そこで駄菓子屋を施設に設けて、管理を入所者の高齢者に任せる。このことで地域の見守りと入所者の生き生き感が大きく向上したとの事。またバーチャルビデオ（VR）を駆使して、高齢者・認知症の方などの視点をリアルに体感する事ができる装置を開発して、健常者が、高齢者や認知症の理解にも繋がったというものには、大きな魅力を感じた。こういった積極的な経営者がいることで、地域にも大きな貢献につながっていると思う。</p>
--	--------------	--

熊澤 光史

全国的な人口減少や過疎化が問題になっている中、赤字経営から黒字へ、そして自治体病院の在り方を病院従事者とサービスを受ける市民とともにサービスの向上に取り組まれてきた長島氏の講演は本市の自治体病院の在り方について、大変参考になる内容であった。

特に印象に残った内容は、次のとおりである。

- ・医師不足を改善するためには、病院単体の問題ではなく医師・看護師が住みたいと思えるまちづくりを並行して進める必要がある。
- ・地域包括ケアの好循環が大切であり、推し進める上で本市の病院・医院・薬局だけの情報交換だけではなく、近隣の病院と締結するなど連携が不可欠である。
- ・病院内の労働環境の見直し。具体的には、当直対応や臨時的な状況で他病院から医師をお招き際にかかる費用を抑え、独自で対応する体制を整える。
- ・救急や急性医療といった急性期医療中心の経営ではなく、リハビリや介護療養をメインとした慢性期医療中心の経営にシフトチェンジする必要がある。
- ・先進医療も大切だが、市民の理解や信用が得られるサービスの向上を目指す必要がある。
- ・医療は誰のためにあるのかを病院と市民が理解できる情報発信を行う必要がある。

介護施設を利用される方が充実した生活を過ごせる居場所づくりを独自に研究し、介護施設及び開発事業を数多くプロデュースされている下河原氏のお話は、介護や看取りに対する向き合い方について、大変参考になる内容だった。

特に印象に残った内容は、次のとおりである。

- ・団塊世代及び団塊ジュニア世代前後は、介護する人がいない時代が訪れる。そしてほとんどの人が高齢者住宅に入居したいと思っている人が多く、これからは多彩な共同住宅が必要な時代がやってくる。
- ・豊かな高齢者住宅をつくるうえで、①多少の障害や疾病があっても暮らせる場所、②地域住民としての暮らしが実感できる場所、③生きがいを見つけ、追いかける場所、④安心して死んでいける場所の4つが必要となる。
- ・従来の施設は同じような境遇にある人達が社会から遮断されて形式的に管理された日常生活を送る場所になっているため、自律性の欠如や選択する自由のはく奪が進み無気力化を助長する仕組みになっている。

		<ul style="list-style-type: none">・地域から認知症のある人を分離する社会は、無意識の偏見を育む素地を作ってしまう。・認知症にならないためには、「生きがい」「役割」「社会参加」「就労」が必要である。・私たちは、認知症のある人たちに私たち自身の価値に基づく理論を押し付けている。それは同時に、そのような理論に沿わない行動を以上や病的なものとしてみなすということを意味している。・日本は自宅や施設での看取りが世界的に少ない国である。(主に病院死が7割以上)・看取りを特別なことにせず、どう生きたいか、どう死にたいかは本人が決めるべきであり、専門職はその希望を徹底的に支える必要がある。
--	--	--